

夏・中村真一郎



夏 中村真一郎

新潮社

夏 (なつ)

●著者^{なかむらしんいちろう}中村眞一郎 ●発行者佐藤亮一

●印刷所二光印刷株式会社 ●製本所

大口製本 ●発行所株式会社新潮社

郵便番号162番 東京都新宿区矢来町71

電話 業務部東京(03)266-5111 編集部

東京(03)266-5411 振替東京 4-808 番

昭和53年 4月20日発行 昭和53年 7月10日 5刷

定価 1600 円

©Shinichirō Nakamura Printed in Japan 1978

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします

「夏」
目次

第一章	羽田にて	7
第二章	長い散歩	26
第三章	黒い部屋	62
第四章	誘惑	104
第五章	肉の森	132
第六章	京の宿	187
第七章	にいまくら	256
第八章	二つの時間	324
第九章	形而上的独語	382
第十章	閉幕	392

夏

夏は夜……………

清少納言枕草子

第一章 羽田にて

私は寢間着の胸のゆるくなったボタンをはめながら、電気スタンドの薔薇色の笠のしたで、光りの輪のなかに淡く色づいて浮び上っている数枚のメモ用紙に、習慣的に目をやった。それは留守中に外部からかかってきた電話の、伝言の束である。私はベッド・カバーをはねのけて枕の傍らに腰をおろすと、何気なくそのいちばん上の一枚を手にとった。紙片の肩のところに、赤鉛筆で大きく疑問符が附せられているのは、電話を受けた家人が先方の言い分に要領を得なかった証拠である。ざっと目を通すと、やはり私にもその内容は謎であった。あるいはこのメモをとった者が、先方の用事を聴きそこなったのかも知れない。——まず冒頭に「長距離電話で、よく聞きとれませんでした」と、註のように書き添えられている。それから、「××氏が母上からのおことづけだと云って掛けてきました」とある。ところが片仮名で自信のなさそうに書いてあるその××氏という姓を、私は全く思い当たらないし、筆記者もまたその姓

の傍らにもう一度、？印を付けているところを見ると、その姓そのものも既に聞き覚えがえかも判らなかつた。つまり家の者も、従来、その姓を耳にしたことがなくて、だからどういふ漢字を当てはめたいのか見当が付かなかつたといふことを示している。そうして、そのような未知の人物からの——それもどこか地方からの——電話では、その相手がいかなる用件を持つていいのか、こちらに予備知識がない以上、いよいよ内容を聴きとるのが難かしかつた、といふことなのだろう。それに地方から長距離電話を掛けてきたその人物は、普段、電話で用事を簡潔に語る習慣のない者なのかも知れなかつた。しかも、その謎の人物に伝言を依頼したという「母上」が××氏自身の母であるとする——幾分の危惧はあるが、そう取るのが常識にかなうのだろうから——その母上なる人物が更に謎の奥の方に潜んでいることになる。伝言によればその母上が、どうやら私に「来ないでほしい」とたのんでいるらしい。とすると、誰だか知らない、どこにいるのかも判らない、正体不明で年齢不詳の女性が、私に来るのをやめてくれと申し出ていることになるが、それは筆記した者が、恐らく私ならば事情が判つていようから（筆記者自身はその経緯をまだ聞かされていないとしても）、ただ相手の言葉そのままだ記録しておけば、それで私には通ずるだろう、と思ひこんだからに違いない。今日の夕方終つたばかりの今度の旅行

中に、私がその××氏と恐らく何か話し合いでも行ったのだらうと、家人は勝手に思いこんだわけだろう。

しかしあいにくのことにはこの文面からは、私にも何の事実も伝わってこないのである。第一、今度の旅行中、私は××氏あるいはその姓の発音がそれに近いかなる人物とも接触をした事実はない。だからあるいは家人は、単に純然たる間違い電話を受けてしまったのだからか。筆者は「申しわけありませんが、なまじりが強くてよく聴きとれなかったのです」と、また弁解的な註を加えてある。電話が遠いうえに方言では、いよいよ苛^がいらさぜられたらうと、私は同情した。

さて次に、どことも思い当らない、従ってその目的も推察できない訪問を、私に中止するようにという伝言の、その理由らしいものが書いてある。「旦那様がお身体が悪くなられて、意識不明におちいりましたので、御一家の方々が集っております。ですから、おいでいただいてもお目に掛れません」——ここにまたもうひとり「旦那様」なる人物が登場する。そして彼は目下、重態の病人であるという。だから私が訪ねて行っても、その病氣のために会えないというのだが、当の私が旦那様なるその病人に会おうとしているのか、それとも母上の方に会おうとしているのか。つまり旦那様は意識がないので会っても無意味だということなのか、それとも母上の方が病人や一族のものの世話で

忙殺されていて、私に会う時間を作り出せないということなのか。それに、またその一族と私とが顔を合わすのは適当でない、母上は判断しているらしいのだが、その母上と旦那様なる人物との関係もまた謎なのである。（念のために断っておくが、私自身にとって母上に当る女性性は、生みの母を含めて、過去に三人いたのであるが、いずれも戦前に世を去っている）。——こうして、私は自分が帰京するや忽ち、出口のない不条理ないわば「カフカ的」と形容されうるような世界のなかに迷いこんでしまったことに気付かされた。そして、今日の午前中までのあの透明な空気と小鳥の声の溢れていた静寂さの支配する高原の時間が、今や無限に遠方へ、次元を異にした宇宙の彼方へ飛翔して行きつつあるのを感じた。——一週間ぶりで私の戻って来た東京の時間のなかでは、すべてが混沌としていて何ひとつ見通すことができなくなっているのだ。そのなかで呼吸しはじめると、忽ち私の脳は奇怪な逆回転をはじめて、物事が混乱しはじめたのである。

それとも私は酔っているために、この簡単なことづての意味が読みとれないのだからか。最近の私は時どき従来私に慣れ親しんでいる人物や事件やが、急に記憶のなから脱落するという、心理的な障害に気付くことが多い。それはアルコールが入った時には、特に頻発する傾向がある。そしてそれを、忌まじまいしいことには、老年の先駆的な現

れとして自分に認めざるを得なくなっているのだ。そこで、そうした脱落が発生した時は、慌てないでゆっくりと、私の意識のうえにその記憶の部分が立ち返ってくるのを待つという策戦に出て、老年の襲来を遠くへ押し戻すことにしている。一枚のありふれた伝言のメモから、「カフカの世界」が拡って出てくる、というような錯覚は、たしかに例の脱落現象がはじまった結果に相違ない。そう私はこの頭脳の混沌のなかに、一条の理由らしい道筋を引こうとした（今度の旅行に同行した某金融機関の役員である、私の学生時代の同級生のKなどは、停年を目前にしてやはりこの記憶の脱落現象を意識しているらしいが、彼は私とは異って、その現象によって戦争以来の不本意な自分の経歴が脳のなから消えてくれれば却って好都合だとさとりを開いていた。「しかし君は作家という職業柄、それでは不便だろうからな。だからそうした脱落現象がはじまったら、すぐ記録を探すとか他人に問い合わせたりということはしないで、あくまで自分の脳だけを働かせて思い出すようにすべきなんだ」、Kはそう忠告してくれた。彼の説によると執拗に老年のなかに眠りこけようとする脳細胞を無理にでも眼覚めさせることが、とかく年齢による疲労の結果、なまけたがるようになっていく脳にとっては必要なので、その努力をおこたると脳の奴は忽ちいい気になってずるを極めこみ、次つぎと地すべりのように忘却の領域を拡大して

行くのだそうである。彼は今日の旅からの帰りの車中で繰り返してそう力説した）

そこで私はまず横になって、ゆっくりとこの奇怪な謎を正面から見つめ、そしてその謎の本体を理性の明るみのなかへ引きずり出してやろうと決心した。これもまた老年への闘いなのだ。ところが毛布を胸まで引きあげた瞬間に、私はこの謎とは何の関係もない一小情景——つい先ほどわが家の玄関のまえてタクシーを降りた時の、あのあたり一面の空屋のような沈黙のなかに、門燈だけが赤ちゃけて光っていた孤独な光景——が、突然に甦って脳裏をよぎってゆくのを捉えた。それは門燈の光りのなかで、軒端の樹木の梢の色が、舞台の背景の立木そのままに、ペンキを塗らたてたように、毒々しいほど緑色に光っている風景であった。それからその情景は、寝静まっている家人たちをわずらわせないために、盗賊のように、——と、自分でいささか滑稽に感じながら（しかしこの情景が甦ってきた今の時点では、もうその滑稽感は一向に私の神経を顫わせてくれないのだが）——古くなってきしみがちな木の階段を、旅行鞆を胸に抱きかかえて、ひと足ごとに足音を忍ばせては、二階へ昇ってきた先程の自分の想像上の姿に入れかわった。（記憶の回復の描きだす映像のなかでは、その経験の主体であった私自身の姿も、その経験の背景になっていた場所のなかへはめこまれて、映画の画面のように現在の私には

見えてくるという面白い事実にはこの頃気がついてきている。それが「自分の想像上の姿」というわけである。つまり今、甦ってきたその記憶のなかの情景は、それを実際に経験していた瞬間の私の視野の捉えた映像そのものの再現ではなく、その経験の光景を現在の時点から私がいわば俯瞰しているものとして出てきているので、従って行為の主体であり観察者でもあった私自身も映像のなかに見えてくるので、これは闇のなかで行われた経験が、思い出のなかではそこに確かに同じ闇が漂っているながら、しかし行動中の私自身の姿も見えてくる、という錯覚と同一傾向の心理的な現象である。それは夢のなかの情景と似ていて、だからこの現象が記憶と夢との区別を不明にしようとする。さて、その記憶の情景のなかの私は、酔いのために平衡を失しがちの足のしたで、ともすれば踏板が悲鳴をあげるのに心臓を締めあがらせていた。（この心臓の緊縮の感覚も、先ほどの滑稽感と同じように、現在の私の心臓には筋肉の動きとなって甦ってくるわけでなく、その記憶の情景のなかに見える私の心臓の位置が緊縮するのが、レントゲン写真のように透視できているのにすぎないのだろう）。——が、そこでまたその情景は溶暗し、いきなりフィルムを逆回転させたように、更にそれより小一時間ほど以前の、盛り場の石畳を敷いた坂道の途中に戻った。その学生時代の私たちが毎晩のように踏み慣れていたすりへっ

た石畳は、小雨に濡れていて、私はそのネオンを映してちらちらと光っている石畳の表面に、ああ、これは三十年まえとちっとも変わっていないな、という感慨を一瞬、意識しながら、丁度、目のまえに停ったタクシーに、かがんで乗りこんだところである。手を伸して傍らのガラス窓を開けると、窓の外には旅の同行者だったKが顔を光らせながら私を覗きこもうと猫背になっている。そのKの肩を支えるようにして、送ってでてきた酒場の女主人が、顔中を笑いの波にひたして、私に向って小さきみに掌を振っている。

——そこでその情景は、更に今日の夕方の上野駅のプラットフォームの雑踏のなかへ逆戻りして行く。列車から降りて別れの言葉を慌だしく述べはじめたKの背中に腕を廻して、私は急ぎ足の群衆のなかを揉まれるようにしながら、「いいじゃないか。もう少しついでにつき合ってほしいな。君はあのぼくたちの夕食後の散歩コースをその後、歩いたことはないだろう」。「夕食後の散歩コース」というのは、学生時代の古い習慣を指しているもので、三十数年前の私たちは毎晩、校内の寄宿寮で夕飯をすますと、何人か同じ部屋の仲間が連れだって、尽きることのない雑談にふけりながら、あの石畳の坂道のある、喫茶店や酒場や小料理屋の密集した地帯へ歩いてやって来て、そして深夜の門限を過ぎてから学校へ戻ることも屢々だった。そこで今度の旅行のあいだKと二人でひたりこんでいた戦前の空気から、私

はまだ脱けだす氣にならないで、既にそこから現在の時間のなかに未練なく戻ろうとしているようにみえたKを何とかしてその空氣のなかへ引きとめようという衝動に私はその時、捉えられていたのである。そのように執拗に相手を説得しようとしている、その私の笑顔が大写しになって、今、眼のまえに浮び出してくる。私はその前、列車が都市圏に入ってくるにつれて、急に沿道の空が各種の人工的な光りの氾濫に染まりだしたのを、胸に立ちこめている学生時代の空氣のなかから眺めながら、必然的な連想によって、その後数年のうちに戦争と共にそのような「人工的な光りの氾濫」が消されることになった、あの石畳の坂道を記憶のなかから甦らせたのだったから。それから、こうした連想による情景の展開によくあるように、その慌だしい夕方のブラットフォームの人混みのなかの光景と、全く対照的な雰囲気を持った、ひと氣のない寂寞とした山のホテルの広いロビーの場面が、溶明して現れてきた。昨夜の旅先の宿の情景である。絶えず水面に泡を生れさせている熱帯魚のガラス箱を背にして、私はすり切れた革のソファに深く腰を落し、目のまえに立って頸をかがめているKに、一枚の小さな紙片を差し出しているのだ。

そうだ、つまり古い原稿用紙の余りを四つ切りにして、わが家の電話機の横に置いてある、私専用のメモ用紙の一枚からはじまった、行先不明の連想の展開は、今、その自

然の流れに乗って、昨日のホテルのその名を肩に刷りこんである、もう一枚のメモ用紙に到達したというわけなのである。無意識の領界のなかで、この紙質をも異にし、そのうえに書かれた筆跡もちがう、二枚のメモ用紙のあいだには、目に見えない水脈のようなものが、予め引かれていて、微かに光りながら私の注意を導いてくれたのにちがいない。精神の層の幾重にも入り組んだ、時間と空間との奇妙な錯迷の闇のなかを、昆虫のような本能的なアンテナの援けを藉りながら。そうしてこの「カフカの世界」が私の意識のうえに突然に先ほどから現出したのは、精神の層の入り組み重なりあつたあいだを、私の記憶の光りが通過しようとして、そこで幾多の屈折を経たために、意識の表面にまでその光りが到達した時には、その秘密の奥深い領域が、奇妙な歪みを見せて映像を結んだからなのだろう。もうその「カフカの世界」の謎の本体に手が届くのは、ほんの直ぐだ。——そういう予感がひらめいて、私が喜ばしい昂奮に捉えられたその瞬間に、ようやく明るみかけた意識のうえに、もう待ち切れないように不意打ちに暗い洪水のような疲労が、意志の堤を切って押しよせて来て（だから私は旅のあいだの精神の異常緊張が、ようやく自分の部屋へ戻りついて、一時に時計のぜんまいがほどける時のような、神経にとっては危険な瞬間に、この時、偶然に出会ったと云うことだろう。もしこのまま、その新しい「カフカの世界

の謎の本体」のなかへ更に突入するとしたら、私の神経はもうその緊張の延長に耐えられないだろうと感じて、遂に反逆しはじめたのだろう）、そのためにすべての記憶の情景は掻き乱され、そしてその濁った視界のなかに、最近、眼りのまゝに臉のうらに跳梁することの多い、あの死者たちの群衆の流れが、また圧倒するように私に向って次つぎと迫って来はじめたのである。その幻影のなかに捲きこまれながら、私は自分が今また死の国の奥深くに迷い入って行くのだと、濁った意識の片隅で微かに感じると、急いで手を伸してスタンドの明りを消した。そうした死の国への訪問のあいだ、現実のこの世での私は眼りに身を任せているのだと、近頃、空想するようになっていたのだし、そのようにして私の心が死の国を訪れようとしはじめる時、その予徴として私は必ず抵抗しようのない激しい眠気に襲われるのだったから。（その「死者たちの群衆」というのは、黒っぽい服装の男か女かも定かでない、——というので判るように、その映像の人物たちの下半身は闇のなかに溶けていて、ズボンかスカートか識別することができなかったのだが——それにまた表情などもよく見えない陰鬱な人々が、ゆるやかな足取りで肩を押しあうようにして、私の方に向って限りもなく氾濫してきて、そして幽霊のように私の身体のかなかをすり抜けて背後に遠ざかって行く幻影であって、それを私はどこか過去に現実に見た曇り日の夕

方近くの盛り場の記憶の甦りだというふうには思わずに、最初にその群に襲われた時に既に、死者の群であると直感したのであった。そうして、そのような氾濫がはじまると、私はそのまま意識の錯迷のなかで、死者たちの作り出してある波のあいだに溺れながら、眼りの世界へ引きこまれて行くのが常であった。しかしこの「死者たちの群衆」というのは、私の精神の構造のどこから、あのように不意打ちに堰を切ったように溢れだすのか、それも冷静な状態の時に探究してみようとするのだが、あいにく正常な安定した意識のなかでは、その瞬間を思いだすことは滅多になく、また思い出すとしても、そうした幻影に襲われることがある、という微かな記憶としてであって、その幻影が私の身体を通過して行く期間の私の感覚そのものを甦らすことができないのは、覚醒後に夢の情景を感覚的に追体験することがほとんど不可能なものと似ている。つまりこの死者たちの群衆というものは、やはりこの世と眼りの世界とを通ずる廊下から溢れ出てくるのだらう。そうして多分、彼等は未来の死の国からというより、過去の、つまり時間の死のなかから現れるのであって、よく眠りは一時的な死に喩えられるけれども、その一時的な死と本当の死との相違もまた、それが未来に属するか過去に属するかというちがいにあるのだ。しかし人は未来の死の国をあらかじめ体験できないので、この過去の死によって本当の死を類推す

る。だから私はその幻影が始まった瞬間、死の世界に今、導かれていると感じるのだろう。そうしてこの時、あの「カフカの世界」のなかで私が不安と焦燥に捉えられていた状態からこの幻影が発生したということも、私にはそれがまたもうひとつの謎に感じられた。なぜなら、私が「カフカの世界」と名付けたこの精神状態、自分の注意が八幡の藪知らずのなかを徨っているような、壁のすぐ向う側に理性の光りの満ちた世界がありながら、その壁は手に触れることもできず、引き裂ぐこともできないという奇怪な感覚、それはたしかにどこか強烈な死の匂いのたちこめているものであつて、ようやくその壁に触れたと信じて喜びに胸が震えた瞬間、暗黒な塵埃とともに壁が崩れおちて、そしてそこから立ち現われたのが、明るい空間ではなく、あの死者たちの群衆であつたということは、死の前味のする「カフカの世界」の彼方にまた別のおびやかすような死の幻影の氾濫が用意されていたということで、これは夢から醒めた瞬間、人がまた全く別の夢のなかにいることを発見する時、おのずと奇怪な謎の雰囲気につえられる、その精神状態にそっくりであつた。

それからわずか数時間の後、私は午前の明るい日射しを浴びた高速道路を、羽田空港に向う車の座席に身を寄せながら、そして今度はまた全く異なる非日常的な感動につえら

れていた。それは私の胸のまわりに快活な音楽を聴いている時のような朗らかな空気が溢れ、そして狭い座席に組んでいる両脚には、若い血液の循環する感覚が満ちていて、あの身体が内側から膨れあがつてくるような肉体的充実感の意識であつた。

私は左側に括っている、エコール・ド・パリの絵のような港の海面へ眼をやりながら、眩しく光る波のきらめきに、大いなる宇宙の生命そのものが笑っている、という圧倒的な靈感を受けていた。そういう時、私はこの目に見える世界が、そのまま現実の存在であるというより、なにかひとつの巨大な比喻のように思われてくるのだつた。眼のまえの世界は、空と海と光りとの元素に還元せられ、そしてその元素の組み合わせが永遠の不死の時間というものを人間の官能で捉えることを可能にするように表現してくれている。その比喩である表現のなかへ、疾走しながら突入して行きつつある私は、宇宙の生命の極微な一分子なのである。そして、その極微な一分子である私は、やはり極微な意識の鏡のうえに、大宇宙そのものを、シャボン玉の表面のように映し出して、こうして歓喜にうち顫えているのである。

そのような私の、眩しく波立っている意識のなかへ、時どき昨夜の眠る直前のあの陰鬱な死者の群衆の幻影の残りが流れ入ってこようとして、しかしその幻影は激しい光りの渦のなかで、忽ち色褪せて消えてしまふ。それは何度も

押し寄せてきては、その度にまことに他愛なく、薄いセロファン紙で切り抜いた人形のように、反りかえり縮まって宇宙の外へなだれのように滑り落ちて行く……

この宇宙の生命の交響曲のなかでは、死は存在感を主張することはできないのである。死はこの瞬間、単なる光りの欠除に過ぎなくなる。そうして、この宇宙のなかでは、各瞬間ごとに無数の分子が生滅を繰り返しているのだから、私という極微の分子のなかに、死が生れようが生が死のうが、それは何の意味もない、と私は感じていた。

このような宇宙の歓喜のなかへ、今、私が突入しているのは、それを生理的に解釈すれば、数日間の高原への旅のあいだの感覚の絶えまない活動と、その結果として堆積された重い疲労のなかから生れて来た死の幻想と、更にはそれに続く寝不足による日常的な状態からの気分の浮き上り、理性が充分に眼覚めないままでリズムミカルな車の振動に身を任せているという肉体的情況、などに原因がある、ということになるのだろうか。あるいは心理的に解釈すれば、昨日の深夜、一枚のメモ用紙から立ち昇ってきた「カフカの謎の世界」における光りの欠乏状態のなかへ、今朝のこの快晴の太陽光線が一気に吸いこまれるようにして溢れたために、逆に昨夜は死の裏側に沈んでいた生がその光線の氾流につれて意識の表面へ浮き上って姿を現わしてきたということだろう。しかし、今の私は、そうした理屈のもの

つともらしきとは関係のない、空気の弾け泡立つような明るい気分のおかげで、青空を天使たちが乱舞し、その純白な翼の影がたえず視野の端を横切るのを感じていたし、また私の乗っている車の天井のうえの、私の眼のとどこかぬ穹窿には、一面の華麗な光りの花園が展開していて、そこには熱い生命力に満ちた匂いが立ちこめている、という感じを抱きつづけていた。

「この眼に見える世界はひとつの比喩なのだ、比喩なのだ」——と、私は心のなかで何度も繰り返しながら、もう一度、窓の外の景色に眼をやった。眼前の可視的な世界が、それ自体ひとつの存在であるというよりは、何か巨大なものの視覚化された比喩であると感じられる時、人は永遠の生命のなかに歓喜をもって包まれるのだ、と私は自分に云いかせていた。その時、風景は空と海との壮大なオペラの舞台から、生命なきコンクリートの長く続く壁に変わった。空港の国際線の玄関に、私の車は滑り入りつつあったのである。

（この超現実的な至福の感覚——それは五十代の初めにさしかかっている現在の私に、絶えず起る心理現象というわけではない。いや、数年に一度しかそうした魔的な状態に魂が捉えられることはなく、しかも全く予感なしで私はそうした陶酔の世界に心身が突然、前後に関係なしに運ばれて行くのであって、その瞬間の肉体全体が膨れあがるよう